令和２年９月 経営協議会（対面・オンライン併用）議事録

Ⅰ．日　時　　令和２年９月１７日（木）　１４時０７分～１６時１１分

Ⅱ　場　所　　千葉大学けやき会館　レセプションホール（３階）

Ⅲ．出席者　　徳久学長、有馬、犬養、河田、黒木、島田、銭谷、西堀、
萩原、舩橋、正宗、宮坂
中谷、渡邊、関、山田、松浦、堀、小澤、中村、米村、
金原、中山、山本各委員

ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ　　角倉、山本各監事
（欠席者：岩田、加賀見、香藤各委員）

Ⅳ．前回議事録について
原案のとおり承認された。

議事に先立ち、徳久学長から、９月１日（火）に就任された角倉英司監事及び山本友子監事について紹介があり、両監事から挨拶があった。

Ⅴ．審議事項（◎学外委員、○学内委員）

１．国立大学法人千葉大学の組織に関する規則等の一部改正について
中谷理事から、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則等の一部改正について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

２．大学院看護学研究院設置準備委員会規程の制定について
中谷理事から、大学院看護学研究院設置準備委員会規程の制定について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

３．国立大学法人千葉大学証明書発行手数料取扱規程の制定について
松浦理事から、国立大学法人千葉大学証明書発行手数料取扱規程の制定について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。
主な意見は以下のとおり。

◎　他の国立大学でも実施しているのか。私立大学の場合、こういった取組みはすぐに新聞に大きく載る。今回の取組みは、学生本位の先駆的なツールであるということを是非広報してほしい。ホームページにも載せていただいて、上手に広報していただくことが必要だと思う。

○　NTT などのサービスを受けてコンビニエンスストア等で発行が可能なシステムを持っている大学は、例えば名古屋大学、京都大学、長崎大学、千葉県だと千葉工業大学などがある。

◎　関東の国立大学では初めての取組みかもしれない。

○　初めてだと思う。この取組みによって利益を受けるのが学生、卒業生なのでホームページや広報紙、あるいは同窓会を含めて様々なチャンネルを使って広報しようと思っていたが、一般に対してというイメージは薄かったので、そういう視点でホームページなどで紹介していきたいと思う。

４．千葉大学入学料，授業料及び寄宿料の免除等に関する規程の一部改正（案）について

渡邉理事から、千葉大学入学料，授業料及び寄宿料の免除等に関する規程の一部改正（案）について、資料に基づき説明があり、審議の結果、承認された。

Ⅵ．協議事項（◎学外委員、○学内委員）

１．コロナ禍における対面授業について

徳久学長から、コロナ禍における対面授業の意義について協議したい旨発言があり、意見交換が行われた。

主な意見は以下のとおり。

◎　大学はやはり人を作る、育てるところだと思う。そういう意味では、師との出会いとか、友達同士の関係とか、そういうことなくして大学生活は成り立たないのではないかと思う。それからメディア授業にも少し触れさせてもらいたいのだが、カリキュラムをそのままメディア授業でやっていること自体がおかしいのではないかと思っていて、ある程度メディアが主体である時期は、人間としての哲学や心理学、歴史上の人物の生き方などをもっと考えさせたり、掘り下げるメディア授業を取り入れてよいのではないかと思う。要するに、今までやっていた授業をオンライン化、メディア化するということを考えている方が多いのではないか。逆にメディアであってもせっかく個々の時間があるのだから、もっと人間の生き方をじっくり考えさせることがあってもよいのではないか。そういう中で対面授業は今まで以上に生きてくるような気がする。やはり大学生活をもっと豊かにするためには、コロナを利用して授業内容も変えていくことが必要ではないかと思う。

◎　今の学生はそもそもパソコンを持っていなくてスマートフォンを使用している。スマートフォンでどれくらいのことができたのか実感としてよくわからないが、どのくらい学びに結びついたのか、よく検証していただきたいと思う。もう１つは、大学生の学ぶことは知識だけではない。研究室に入って、先生からいろいろなことを学ぶ。専門のことだけではなくて、生き方であるとか、そもそも学問とは何だとか、あるいはこれからの道筋、これからどういうことを学ぶかなど、フォーマルではなく、お酒を飲みながらインフォーマルな部分で学ぶことも多い。大学を卒業して血肉になったり、あるいは人生の糧になる。現在はそういった学生と先生のインフォーマルな交流というか、そういうものが無くなっているかと思うが、これからウィズコロナ、ポストコロナになれば解禁になると思うが、大学として何か考えていることはあるのか。

◎　ハーバード大学に８年半ほどいたが、今、全てオンラインになって、それが受け入れられているということでは全くない。なぜこれほど高い月謝を払わなければならないのかという大変大きな問題になっている。私の体験を振り返って考えると、先生によっては、にじみ出るような人柄があって、講義を聴くことによって啓発を受

けるということがあるので、このままオンラインに落ち着くということは多分ないだろうという気がしている。

◎　この前の夏季特別集中討議の時にもお話ししたが、やはり学生同士のインタラクティブというのはすごく大事だと思っている。講義の場合、教授と学生の間のインタラクション、インターアクティブなコミュニケーションというのはすごく大事であって、オンラインだとそれがどうしても一方的に流れがちである。同時に学生間の討論、お互い夢を語るとか、いろんな議論をするとか、それは先生との議論では得られないような内容もあると思うので、やはりどうしても対面授業、みんなが一緒になって授業を受けるという場面が必要になると思っている。

◎　皆さんから出た意見で尽きていると思うが、授業、あるいは学園生活を通じて先生との人間的な交流、授業以外でもいろいろご指導いただいたことが深く心に残っている。やはり先生との交流、それから同じ学生同士の交流というものがあって初めて私は大学ではないかと思っていて、対面授業がなくなるということは、これはもう大学ではないのではないかという感じがする。メディアを使った授業ももちろんあると思うが、これは行く所まで行くと千葉大学がいらなくなる。日本に大学が一つ二つあればいくらでもリモート授業ができるわけで、もちろんメディア授業はメリットもあるし、必要なことは十分理解できるが、対面授業というのは絶対に大学には不可欠なものだと思っている。一方で日本の小学校、中学校、高校では今回のコロナによる休校時期を通じて、非常に ICT 対応、メディア授業対応が遅れていることが明らかになった。恐らく休校期間中にメディアを使って子供たちとコンタクトしながら家庭学習を進めたのは、15％あるかないかだと思う。千葉大学のこういったオンライン授業の経験、メディア授業のメリットというものは小中高校でも経験できるように、ぜひ教育学部が中心になると思うが、小中高におけるメディア授業をこれからどうやるかということについての指導力を発揮していただければありがたいと思う。コロナというのがまたいずれ山が何回かくる可能性があるので、ぜひその点についてのご指導もお願いしたいと思う。

◎　私は、今のコロナの機会というのは将来的な大学の教育がこういうメディアでどこまで可能なのか、我々が従来受けたようなゼミなども含めてどこまでできるのかということを考える上でよいチャンスだと思っている。私自身もゼミのような少人数の議論や先生とのインフォーマルな空間といった対面が必要だと思っているが、今の学生はそういったことも含めて、チャットなど、いろいろな手法を使いながらやっていることも事実である。だから私はそういう意味では旧世代の人間だと思っているけれども、彼らの方がもっとメディア授業やメディアを使ったようなインフォーマルなところについてもそういうことができるということで、我々とは少し変わった人間だと思っている。これはこれでウィズコロナの時代になったのかも知れないが、また別のコロナに代わる感染症が起きないとも限らないので、メディアを使用して従来の大教室の講義に加えてゼミのようなもの、あるいはもっとインフォーマルな空間で学生同士、あるいは先生と学生がやり合うような空間をどこまでできるのか。そこでやってみて何が足りないのかということを今の間に確かめておくことが必要なのではないか。徹底的にメディアを使ってやってみて、それで何が足りなくなるのかということを考えてみる時代になったのではないかと思う。

◎　今までお話になられた皆様方と基本的には同じ考え方である。何のために学ぶのかということだろうと思う。お話をお伺いしながら思い出したことがいくつかある

ので、そのことについて申し上げたい。１つは、師友ということである。師は教師の師、それから友は友達の友である。これは教師と友達という意味ではなくて、友達同士がお互いに師になる、そういう関係のことを師友というと聞いている。学校でいろいろなサークルができ、いろいろな交流が行われる。そういう中でお互いに学び合うということは、それぞれが相手に対して師になっているということだと思う。こういう環境はメディアでは多分生まれないだろうということで、ぜひその師友の関係を維持していく必要があると思う。それからもう１つは、これは薩摩、鹿児島県に郷中教育というのがあって、幕末になぜ薩摩があれだけ大きな影響力を持ったかということの基本に、私はやはり教育があったと思っている。その郷中教育というのは、それぞれの士族を中心とした家臣の若手の人たちが、お互いに郷、その地域の中で、言わば若者組みたいなものを作って、そこでお互いに高め合うことを非常に重視した。この郷中教育で重視されたのが、１つは詮議ということ、もう１つは昵懇ということだった。詮議というのはいろいろな問題を徹底的に議論するということである。若い仲間の人たちが徹底的に議論してある問題を導く意見を戦わせる。一方で昵懇というのは、詮議が終わった後、例えばお酒を飲みながら、あるいは野外で、今で言うとサークル活動をしながら人々がお互いにお互いの人となりや個性などを認め合う。これが昵懇である。この詮議と昵懇が相まって教育を行わなければならないのではないかということで、薩摩の教育が行われてきたと私は理解をしているが、これがまさに、コロナが来ようが、いかにコンピュータが発達しようが変わらない人間の本質ではないかと思っている。ぜひそういうことを忘れずに教育にあたっていただきたい。

◎　夏季特別集中討議の時に、千葉大学の学生と教職員全員の PCR 検査をしようというお話をした。そのためにいくら費用がかかるかという計算をして提案したが、その時の計算のもとは１検体２万円で算出しているが、もっと安くできるはずである。これから PCR 検査の需要はすごく大きくなるので、千葉大学が PCR センターを作って、外注して受ければかなり財政に寄与すると思う。これからますます増えると思うので、そういうことも考えて学生に１年に何回か PCR 検査を行うという形で、普通の授業を再開する。透明性のある対応を取っていれば、もし感染が起こったとしても世間がそれを認めて、こういう方法が良いということになると思う。その先鞭をぜひつけていただきたい、と同時に財政的にも潤うような方法も考えてほしい。

◎　皆さんのご意見と大きく違わないが、先ほどのハーバードの件だが、アメリカでも今メディア授業だけでよいのかというのは大議論になっているようである。私もハーバードに留学したが、メディア授業、アメリカの場合、特に MBA はディベート中心の授業で、お互いに喧々諤々先生や生徒同士でやり合う授業だが、日本の場合はずいぶん変わったとはいえ、まだ自らどんどん積極的に意思表示をしたり、発言をするのが得意ではない学生も他の国に比べると多いと思う。対面授業とのハイブリッド、あるいはメディアをどうするかというのは、ある程度日本人の特質も考えて行うべきではないかと思っている。

Ⅶ. 報告事項（◎学外委員、○学内委員）

１．国立大学法人法第三十四条の二における土地等にかかる貸付けの認可について

松浦理事から、国立大学法人法第三十四条の二における土地等にかかる貸付けの認可について、資料に基づき報告があった。

２．千葉大学グローバルプロミネント研究基幹自己点検書について
　関理事から、千葉大学グローバルプロミネント研究基幹自己点検書について、外部評価に協力いただいた経営協議会委員の先生方に謝辞が述べられた後、指摘事項等について説明があった。

３．令和３年度経営協議会開催日程（案）について
　小島総務課長から、令和３年度経営協議会開催日程（案）について、資料に基づき報告があった。

４．附属病院の運営状況について
　横手副学長から、附属病院の運営状況及び新型コロナウイルスへの対応状況について、資料に基づき報告があった。続いて、中山副学長から、新型コロナウイルスに対する研究概要について、資料に基づき説明があった。
　主な意見は以下のとおり。

○　県の会議に出席していると、コロナの件で千葉大学病院のステータスが相当高くなっていることを感じる。皆さんすごい信頼感を持ってくれていて、褒め言葉をいただいている。その他に、附属小学校・中学校がメディア授業でかなり先進的に走っていて、テレビなどで相当放映されていて、評価もかなり高まっている。千葉大学がスマートラーニングを早々と入れて、それを附属小学校・中学校でもいち早く取り入れてというのが、ギガスクール構想の先陣になったようで、そういう意味では千葉大学のステータスがどんどん上がってきていると思う。

５．令和２年度夏季特別集中討議（オンラインシンポジウム）について
　中谷理事から、９月４日（金）に開催された令和２年度夏季特別集中討議（オンラインシンポジウム）について、資料に基づき報告があった。

６．新型コロナウイルスへの対応について
　中谷理事から、新型コロナウイルスへの対応における教職員の海外渡航について、佐藤（之）副学長から、学生の海外留学について、渡邉理事及び小澤副学長から、授業の実施状況等について、資料に基づき報告があった。
　主な意見は以下のとおり。

◎　海外にいる留学生がビザは有効でも入国できないという問題がメディアでよく取り上げられているが、千葉大学ではどのような状況か。

○　海外からの留学生で、帰国をしてそのまま戻ることができなくなっている学生がいるが、徐々に受入れが可能な状況になっているので、受入れ可能な学生から順次受け入れる体制で今臨んでいるところである。

○　１０月１日からの国費留学生で正規に入学する者は、今日、明日辺りに来日して１４日間隔離されてから大学に来ることになる。いろいろなケースがあるが、現時点では、科目等履修生、交換留学生については中止している。基本的には正規で入学する学生、あるいは既に学籍を持っている学生で、一時帰国している学生については必要あるいは可能であれば日本に戻ってくる。ただし、スマートラーニングの授業を行っているので、必ず日本に戻ってくださいということではなくて、リモートで

も必ず研究等を進めてもらうということにしている。

◎　どこの大学も急にメディア授業に切り換えないといけないということで非常に苦労された点があると思う。その反面、学生から予想されなかったようなポジティブな反応やこういう形でのメリットは出てきているか。

○　学生に対して授業評価やメディア授業全般に対するアンケートを様々な形で行った。もちろんメディア授業でうまくいっていない事例もあるが、逆に、メディア授業でうまく時間管理ができて、予習復習も従前よりもできたというようなことや、地方の実家にいて、なかなか千葉まで行けなかった学生が学びの継続が可能だった、それから普段は授業が終わった後に先生をつかまえて質問をすることがなかなか難しかったが、様々な ICT を使って質問がしやすかったという、そういう回答もありました。もちろんメディア授業についてはいきなり始まったので、先生方によって作り込みに差が出ているということは確かだが、例えばもう何年もこういうことをやってきたCALL英語の授業などについてはこのメディア授業への対応というのは非常にスムーズに移行できて、学生の評価も大変高かった。

以　上